バスの中

ムネクニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バスの中

【Ｎコード】
Ｎ３２６６Ｏ

【作者名】
ムネクニ

【あらすじ】
久しぶりの乗ったバスに揺られながら昔を思い出す坂東。
あのときした寄り道。

あれは小学生ぐらいのことだったろうか。バスに揺られながら、坂東は子供時代に思いを馳せる。
目的地は15分も歩けば着く距離だったが、今日は何故かくたくたに疲れて果てている。たまのバスくらい、許してもいいだろう。今は、そういう気分だったのだ。
都内をぐるりと一周するこのバスは、坂東にとって無駄な寄り道もしてくれる。引っ越した当初は散策して回ったものだったが、仕事に忙殺される近頃ではそんな余裕もない。
車一台分上から見るものは、久しぶりの眺めだ。
そういえば、あのときも寄り道をしたのだった。

夏休み突入を控え、通学路には朝顔の鉢を持った子供の姿がちらほら見られるようになってきた。
坂東智樹と佐久間光一はと言えば、昨日のうちに既に荷物を持ち帰っている。二人とも身軽なものだった。

「もうーいーくつ寝ーるーとー、なーつーやーすーみー、ってな」
「ええっ。ないわあ、それ」

親同士が仲がいいということもあって、夏休みはいっしょにキャンプに行く約束をしていた。始めてのキャンプということで智樹も光一も随分とはしゃいでいた。

「なあ、智樹ィ。マシュマロって焼くとちょーうめーって姉ちゃん

が言ってたんだけど、お前食ったことある？俺、なんかの映画で巨大マシュマロマンみたいなのみちゃってから、焼いてないのでさえ嫌なんだけど」
「ああ、わかった。俺もそれ見たことあるや。なんか幽霊退治するみたいなやつじゃない。でも、俺別に普通に食うよ。マシュマロ。兄貴なんか作ったことだってあるし」
「お前の兄ちゃん菓子作りするもんなー。うちの母親、そういう男はもてるから見習いなさいってうるせーもん」
「まあ兄貴がもててるかどうか、俺は知らないけどね」
「ふーん。ま、いいよ。試してみてまずかったら智樹にやれるってわかったし」
「ええっ。なんだよ。それが狙いだったのかよ」

木々を透かして降り注ぐ8月の光は、少年達の黒い頭をじりじりと焼いていく。

「あっちー。すっげーあちー」
「うん、あちい。日陰入りたいな」
「じゃあ智樹、寄り道しよーぜ」
「寄り道？」

それは意外な言葉だった。光一はその粗暴な言葉遣いに反していいとこのお坊ちゃんというやつだった。学校の荷物だって、塾に行くために学校まで迎えに来た光一の母親の車にいっしょに積ませてもらった、というのが本当のところなのだ。週五で習い事と塾の入っている彼が、いつそんな道を見つけたのだろうか。

「姉ちゃんが、向日葵がすげーいっぱい咲いてるとこがあるって言ってたんだ。行こうぜ。」

ぐい、と手を引かれた。二人は、段々と足早になり、最終的には駆け出していた。

「おおっ。これすげえ」
「だろー。俺達より背、高いんだぜ」

仰ぎ見る二人の視線の先には、真っ青なキャンパスに黄色い絵の具をぽたぽたと垂らしたような、鮮やかな光景が広がっていた。

「すっげーよな。ちょっとここで遊んでこーぜ」
「でも、誰かの畑なんだろ、ここ。怒られるんじゃねえ」
「だいじょーぶだって。俺達くらいだったら、ほら」

そういって光一は向日葵畑へと突っ込んでいった。

「だれか来てもみっかんねーって」

智樹には光一のくぐもった声が届くが、姿は見えない。
なるほど。確かに子供の体など、覆い隠してしまうようではあった。

「確かに」
「な。そうだろ。じゃ、ここでかくれんぼしよーぜ」
「えー。もしかしてお前そのまま隠れる気じゃないだろな」
「そうだけどー？別にいいじゃん。俺が見つけた場所なんだし。ここって鬼の方不利そうだろ。隠れる方がぜってー楽しいと思うんだ」
「光一の姉ちゃんだろ、見つけたのは。でもどうせやだっつっても

強行突破されそうだし、いいよ。やってやるよ、鬼」
「まあ二人だけっていうのもアレだけどなー」
「そう思うんならここ来る前に聡とか明永とか誘って来ればよかったのに。頭わりいなあ」
「そういう智樹だって、気付かなかったろ。ほら、いいから早くやろーぜ。じゃあ三十数えろよ」

俺はどんな場所だか知らなかったとか、かくれんぼ提案したのはお前だろとか、色々言いたいことも言えない内に、光一は行ってしまったらしかった。
向日葵が揺れて、波ができる。そのうねりは、畑の奥へ奥へと進んでいった。
辿ればすぐに見つけてしまえそうだが、それではつまらない。
智樹は畑へと背を向け、数を数えだした。

いーち
にーい

さーん、と口に出しながら、智樹はあることに気がつく。さっきまで火傷しそうに暑さを感じていた頭のてっぺんが、いつの間にか楽になっていた。
そういえば、畑のくせに、ここはけっこう日陰が多い。
智樹のうちなどが正にそうなのだが、もしかしたらこれは管理者が歳で畑仕事ができなくなった為なのかもしれなかった。
祖父が去年までアブラナを生やしていた畑は、今年はアブラナと雑草と蔦とで、混沌とした様相を呈した。
隣の畑との境界にしていた柿の木も、枝が畑の方までせり出して大変なことになったのだった。
とりあえず十まで数えた。

「もういいかーい」
「まだー」

さっきよりも随分遠くの方から、微かな返事が返ってきた。
向日葵の背丈が邪魔で、この畑の広さがどんなものかはわからないが、もしかしたら三十数える頃には声も届かなくなっているのではないだろうか。
不安を覚えた智樹は、今度は若干早口となって数を数えた。

じゅういちじゅうにじゅうさんじゅうし……

得体の知れない不安に急かされるように数え上げていく。
二十まで数えるのは、さっきの半分もかからなかった。

「もういいかいっ」
ミーーン
ミーーン

折悪しく蝉が鳴き始め、光一の返事は聞こえなかった。
声の大きさから距離を考えれば、ここで数えるのをやめてもよかったかもしれない。だが、もしさっき、光一が返事をしていたとしたら、智樹の声は彼に聞こえているということになる。数を誤魔化したことがばれれば「もっかい数えなおしなー」なんてことも言われかねなかった。それは避けたい。
こうなってしまえば、一刻も早く数え終わり一刻も早く光一を見つけ出すことしか、智樹の頭には浮かばなかった。

ニジュイチニジュニニジュサンニジュシニジュゴニジュロクニジュシチニジュハチニジュクサンジュ

最早呪文のような早口で三十まで駆け抜け、畑へと飛び込んだ。

「もーいーかーい」

おざなりに言う言葉に返る返事はやはりなく、揺れる向日葵も、智樹の視界の内には無かった。

「どこ、どこにいるんだよっ」

むきになって探しても、反応はぴくりとも返らなかった。
ときたま生暖かい風が智樹の首をなで、向日葵の頭を揺らすばかりである。

「降参するからっ！出てこいよ光一」

白旗をあげてみても、光一は姿を見せなかった。
俺が今どんな気持でいるのか、あいつはわかってるんだろうか、と智樹は思う。
光一が、胸騒ぎを覚えながら友人を探すことの苦痛を知っていたならば、こんな状況になっても隠れていたりはしないだろう。ということは、どんな気持でいるかなんてわかっているはずがないのだが、智樹はその事実を恨めしく思った。

こういちぃー
どこだよぉー

智樹はまだ、探し続けているだろうか、と、坂東光一は思った。

目的地まではあと停留所ひとつぶんだ。人は大分少なくなっている。
佐久間光一が坂東光一となったのは、単純な理由によるものだった。
「坂東」という女性の家に婿入りした、それだけのことだ。
光一の父はそういうことには拘らない人だった。むしろ、嫌っていたといってもいい。家柄や身分の差などといったことについては、父はそうとうに苦い経験を積んできていた。

そもそも資産家の家を捨ててかけおちしたはずの光一の母は、出奔後もあきれるくらいの「お嬢様」であり続けたらしいとは、父に聞いた話だ。
光一が小学生の頃にやたらと塾やらなんやら通わさせられたのも、彼女が裕福な生活を引きずっていたためだったのだろう。
貧しい生活に嫌気が差した母親と、父親との亀裂は光一が小学生の頃に決定的となり、ついに彼女は父親と別れて実家に帰って行った。その影響で、夏休みを目前に控えながら、光一は引っ越すこととなった。しかし、純粋にキャンプを待ち望む親友に、どろどろした家庭事情を話すことなど、到底出来なかった。
だが、忘れられたくも無かったからこそ、あんな演出をしてみせたのだった。
光一の様子がいつもと違うことに気付いていたのか、あのときの智樹は妙に不安げな顔をしていた。
そのことにちくりと心は痛んだものの、彼にとって自分が忘れられない存在となれるであろう予感に興奮してしまったのもまた事実なのだった。

あれからもう十年以上経つ。
しかし、かつての親友を忘れることは無い。
結婚相手とすら「坂東」という姓を縁に知り合ったことを思えば、光一は思っている以上に彼のことを大事に思っていたのだろう。
妻に、坂東智樹という人物を知らないかと聞いたことがある。しか

し親戚にも知り合いにもそんな人間はいないとのことだった。世の中というものはそううまくいくものではない。彼のことは在りし日の思い出としてのみ光一の中に残っていくものと思われた。そんなものだ。

「匂当台公園駅、匂頭台公園駅」

着いたようだった。
ノンステップバスでは地面との距離感が他とは異なるらしい。バスになど滅多に乗らない光一には知りようもない事実は、妻が教えてくれたことであった。
こうして過去は過去へとしまわれ、現在に塗りつぶされていくのだろう。
仙台駅の方向へと歩き出す。少し先の車道の端に、珍しくも群馬ナンバーの車が停まっていた。窓から飛び出した手には地図が握られていた。

「あの、すいませんちょっと」

暫く悩んだらしい彼が顔を上げるタイミングと、光一が腋を通るタイミングが、合った。
呼び止められ、光一は始めて運転席の顔を正面から見つめた。

「あ」

懐かしい顔が、あった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3266o/

バスの中

2010年10月16日00時05分発行